平成 30（2018）年度
大妻女子大学入学式　学長式辞

新入生の皆さん入学おめでとうございます。大妻女子大学の教職員を代表して、心よりお祝い申し上げます。ご列席の御父母、ご家族の皆様にも、お嬢様のご入学、心よりお慶び申し上げます。本日入学された皆さんは、先ほど宣言したように 2205 名です。

大妻女子大学は、今から 100 年以上前の 1908 年、明治 41 年、大妻コタカによって、裁縫・手芸の私塾として呱々（ここ）の声をあげました。それから 110 年、現在では、本学は、家政学部、文学部、社会情報学部、人間関係学部、比較文化学部の 5 学部、短期大学部、大学院人間文化研究科を抱える総合大学となっています。

コタカが私塾を始めた 110 年前とは、一体どのような時代だったのでしょうか。当時の日本は、日清戦争、日露戦争を経て、資本主義国として確立していくさなかにありました。日露戦争は、日本の実力から言ってやや無理な戦争でもあったため、日本は日露戦後不況と呼ばれる不況に苦しんでいました。にもかかわらず、あるいは、そうであるからこそ、コタカは、女性が職業を身に着け、家族や社会を支える一員となることの大事さを強く認識したといえるでしょう。それまでの女子教育機関は、いわばエリートによるエリートのための教育機関でした。それに対し、コタカは、不況の中で苦しんでいる普通の家庭、何ら特別でない普通の女性が、社会の中できちんとした生活を営むにはどうしたらよいか、そして普通の女性が社会的に自立するとはどういうことか、そうしたことを考え続けて、大妻技芸学校の設立を決意したのです。

戦前の日本は現在よりもはるかに、階級的格差の強い社会、男女差別の強い社会でした。女性には選挙権がなく、家制度も男子長子相続制でした。女性が社会の中で自分自身を確立することははるかに困難だったのです。そうした状況の中、コタカは「女性の自立」のための独自の戦い方を、女性が社会に受け入れられやすい「技芸を身に着ける」ことから始めようとしたのです。本学は、創立以来「女性の自立のための女子一貫教育」を建学の精神としていますが、その「自立」の根源には、こうした若き日の大妻コタカの独自の考え方と強い意思があったということができるでしょう。

では、「自立」とは、どのようなものでしょうか。手に職を身につけること、仕事に就くこと、言い換えると、自分で稼げる「経済的自立」こそが「自立」の本質と捉えられがちです。しかし、本学の創設者、大妻コタカは、「自ら学ぶ」こと、「社会に貢献できる力を身につける」こと、「その力を広く世の中で発揮していく」ことが、「女性の自立」につな

がると考えていました。コタカは、私塾をはじめてから10年後、この私塾を大妻技芸学校としますが、その際に「恥を知れ」という校訓を制定しました。これは、現在、しばしば口にされる他人に対しての言葉ではなく、「自分を高め、自分の良心に恥ずる行いをするな」という自分への言葉でした。

まず、「自己を正しく認識する」こと、そのために「自ら学ぶ」こと、「精神的な自立」を実現することが大切だと、コタカは考えたのです。「精神的自立」が「経済的自立」や「社会的自立」の前提としてとらえられているのです。自分で考え、自分で決定できるようにすること、主体的に物事をとらえられるような豊かな人格を形成することが、「女性の自立」のための条件なのです。

もちろん、本学では、実技実学も重視しています。実技実学は、社会において専門職業人となっていくためには不可欠なものです。しかし、ここでも、単純に、技術や技能を教える、知識を付与するのではなく、広い意味での「実践知」を身につけることが重要だと考えていました。「実践知」、これはもともとのギリシャ語では、「深い思慮」という意味でした。現実の社会に直面した時に、それまでのやり方に拘泥するのではなく、あるいは、頭の中の思い込みだけで対応しようとするのでもなく、現実を的確に把握し、弾力的かつ創造的に物事に対処できる力が「実践知」です。

本学の教育理念は以上のようなものですが、私たちは、皆さんに、これからの大学生活を意義あるものにしてもらいたいと心より願っています。そして、意義ある大学生活を送っていくために、いくつかのことを皆さんに期待したいと思います。

ひとつは、これからの勉強を社会の動きと関連させながら進めていって欲しいということです。世界は、現在、大きな変動期に入っているようにみえます。ブレクジット、トランプ政権の誕生、移民排斥、頻発するテロなど、第二次世界大戦後、長く続いてきたグローバル化の流れが、今、大きく旋回しようとしています。その背景に存在するのは、国家間、国内諸階層間の格差の拡大です。

国連の統計によれば、最も豊かな国々に住む人々（最富裕5ヶ国）と最も貧しい国々に住む人々（下位5分の1ヶ国）の所得差は、1950年の35対1から、73年には44対1、92年には72対1、そして2016年には148対1となりました。1820年の格差が約3対1、1870年が7対1、1913年が11対1でしたから、この200年の間に、国家間の経済格差、経済的不平等は、50倍以上も拡大してきたのです。

国内格差も、先進諸国、新興工業国、開発途上国、あらゆるところで広がりました。先進国グループとされるOECD諸国をとってみると、ドイツとイタリアを例外として、ほとんどすべての国で、賃金の不平等が拡大しました。ラテンアメリカ諸国では、1970 年代には所得分配の不平等がいったんは縮小したものの、82 年の中南米危機以降、短期間で不平等が再び拡大し、現在まで格差は高い水準に固定されたままです。市場経済への移行を進めた東欧・CIS 諸国でも 90 年代半ばまでの 10 年足らずで格差は一挙に倍増しました。国連ミレニアム宣言は、「私達は、極貧の悲惨で人間性を奪うような状況から、私達の仲間である男女そして子供達を救済することに努力を惜しまない…」と述べています。この宣言の緊急性は、21 世紀の今日、ますます高まっているといわなくてはなりません。

わたしたちは、皆さんにこうした問題についても関心を持って欲しいと考えています。皆さんは、大学での勉強は、こうした社会の動き、世界の動きと関係がないと思っておられるかもしれません。しかし、皆さんが高校で学んできたこと、そしてこれから学ぶことのすべては、社会とのかかわり抜きにはありえません。「何のために勉強するのか」と問われた時、直ちに答えをだせないかもしれません。ある程度答えがわかっているようでも、勉強している内容に興味と関心を持てないかもしれません。しかし、皆さんのこれまでの勉強、これからの勉強は、よりよき暮らし、よりよき生き方を考える時、必ず役に立ちます。そして、先に見たような過度の格差の拡大は、よりよき暮らし、よりよき生き方を遂行していく前提条件を壊します。ですから、自分たちの暮らしが社会のどことどうかかわっているのかを常に考えながら、自分たちの勉強を進めていって欲しいと思います。

ふたつめは、主体的にものごとを考えて欲しいということです。高校までと違って、大学での勉強は、ものごとを知る、という以前に、どのように物事を考えるかという、考え方を学ぶ場という特徴があります。正解がないことを勉強するのが、大学での勉強だということもできます。詩人の谷川俊太郎に「学ぶ」という詩があります。読み上げます。

あなたは学ぶ
空に学ぶ
空はすでに答えている
答えることで問いかけている

わたしは学ぶ
土に学ぶ
隠された種子の息吹
はだしで踏みしめるこの星の鼓動

あなたは学ぶ
木に学ぶ
人から学べぬものを
鳥たちけものたちとともに学ぶ

わたしは学ぶ
手で学ぶ
石をつかみ絹に触れ水に浸し火にかざし
愛する者の手を握りしめて

あなたは学ぶ
目で学ぶ
どんなに見開いていても見えぬものが
閉じることで見えてくること

わたしは学ぶ
あなたから学ぶ
わたしと違う秘められた傷の痛み
わたしと同じささやかな日々の楽しみ

わたしたちは学ぶ
本からも学ぶ
知識と情報に溺れぬ知恵
言葉を越えようとする言葉の力を

そうしてわたしたちは学ぶ
見知らぬ人の涙から学ぶ
悲しみをわかちあうことの難しさ

わたしたちは学ぶ
見知らぬ人の微笑みから学ぶ
喜びをわかちあうことの喜びを

みっつめは、この詩の最後の方の段落に関わることです。私たちは、皆さんが、大学生

活のなかで、先輩、同輩、後輩とよい関係をつくって欲しい、と願っています。さきほど、「自立」とは何かということをお話ししました。精神的自立は、まず個の自立であり、個の確立です。しかし、このことは、自分さえよければいいということを意味するものでは全くありません。「他者との関係のなかで、自己を見つめ直し、相互の力を活かし合い、自己実現できる人間として自立すること」、これこそが本来の自立です。種々の人間関係のなかで、自分の位置をきちんと確立して欲しい、そして、ひとに共感する能力を培って欲しい。人の喜びを喜びとし、人の悲しみを悲しみとし、人の怒りを怒りとできる人になって欲しい。そのように私たちは考えています。

今年の冬季オリンピックで、多くの女性アスリートたちが活躍しました。私も、その活躍から多くの喜びを受け取りましたが、なかでも心打たれたのは、500M スピードスケートでの、小平奈緒選手のふるまいです。自分が滑り終わった後、後続の選手のために「静かにしましょう」と指を口に当てました。試合終了後に韓国の李相花（イ・サンファ）選手に寄り添い、ともに会場を回りながら、ハングルで「チャレッソ（よくやったね)」と語りかけました。この小平選手のように、気取らず、自然に、人に対する敬意と共感を発露できる人間になりたい、そして、皆さんにもなってほしい、と思います。

最後に、現在は、女性が輝く社会といわれています。しかし、人に輝かせてもらってはいけません。自分自身で輝けるようにすることが大事です。そのためには、努力がいります。ともに、そのための努力をしていきましょう。

改めて新入生の入学をお祝いし、皆さんのこれからの大学生活が、実り多いものとなることを祈念して、私の式辞といたします。みなさん、本日はまことにおめでとうございます。

2018 年 4 月 1 日

学長　**伊藤　正直**